



「月光Ⅳ」 使用した筆は一本のみ。筆圧だけで濃淡をだした。



撮影：Stefan Eichberg



「月をこそながめなれしか星の夜の深きあはれを今宵知りぬる」。女流歌人、建礼門院右京大夫が平安末期に詠んだ歌だ。これまで夜になると月ばかりを眺めてきたが、恋人の死をきっかけに星も深い情緒があると知ったとの心情を吐露している。一説には当時、星を主題に詠むというのが極めてセンセーショナルだったという。つまり、それほどまでに日本人は夜空で星ではなく月を愛でてきた。

時代も場所も変わって19世紀のフランス。ゴッホの晩年の代表作のひとつに「La nuit étoilée」がある。直訳すると「星空の夜」だが、日本では「星月夜」という題で知られる。「死によって星に到達する」というのがゴッホの意図だったようだが、「月」を題名に挿入してしまうほど日本では月を素通りできない。

私も例外ではない。水平線しか見えぬ沖縄の海、静寂が支配するシチリアの海岸、古代の遺跡を遠くに望むシリアの砂漠、歴史の重みを感じるヨルダンの谷。どこに行っても月を探してきた。都会

を離れ、暗闇にずっと一筋差す月明かりを眺めると物悲しく、それでもどこか満たされるような気持ちになる。太古の昔を覗き込み、これからの未来を映し出すような幻想にも包まれる。

夜空になにを見るのか。その感情をどう表現するのか。古くから芸術家にとって永遠の課題。そこには時の移り変わりも国境もない。私もこれまで「月」や「夜」を何度となく題材に扱ってきた。

例えば、湖面や草原などを照らす一条の月光を描いた作品(写真⑤)。表現にあたってはベートーヴェンの「月光(ピアノソナタ第14番)」を拝借した。本来はピアノで演じられる情景を一本の筆で書き上げるため、譜面を日本語の音名(ハニホヘトイロ)に置き換えて仮名で連綿と綴った。仮名をベースとしたモダンアートである。

「音楽と書」、「東洋と西洋」、「伝統とモダン」。それが融合し、渾然一体となりながら誰もが一度は見たことがある満月の白さ、はかなさ、神聖さを体現できないか。それにこだわったのは、「あらゆる境界線を越える」という意識。そうでないと古今東西、人々を魅了してきた夜空というものに到達できないに違いない。

月には不思議な吸引力がある。小説家マーク・トウェインは「人間は誰しも月であり、他人には絶対に見せない裏側がある」と述べた。太陽がエネルギーで躍動的だと受け止められるのと対照的に月は静かで控えめというのが一般通念だろう。それでも月は世界中で永遠のモチーフになってきた。

そこに仮名との共通点があるかもしれないと思っている。太陽が照らさなければ月は輝かない。日本では仮名は漢字の陰にひっそりと咲いてきたような印象がある。だがひとたび光を浴びれば仮名も月も楚々とした色彩を放つ。だからこそ、私は仮名が月と同じように世界に受け入れられる可能性を感じている。